



FIWA®代表理事リレー投稿
「気になるあの人、あのこと、ひとこと話 Vol.5」



寄稿: FIWA®協会
副理事長 岩城 みずほ

みなさま、いかがお過ごしでしょうか。コロナの芳しい収束も期待できないまま季節が巡っていきま
すね。さて、今回は、公益財団法人日本フィランソロピック財団の理事、事務局長を務めていらっし
やる長谷川攝さんの活動をご紹介します。

■変化しているお金の流れ

世界第2位の個人金融資産額を有する日本。しかし、個人の寄付額は米
国の5%にも満たない現状だといえます。

でも、私たち日本人が寄付に関心がないかといえば、そういうわけではあ
りません。寄付元年とも呼ばれる東日本大震災以降、ここ数年で、クラウ
ドファンディングやふるさと納税など、個人が小口の寄付をする方法が増
えてきました。



長谷川さんは、日本でも、まだ寄付に踏み切っていないなくても、寄付を通じた社会貢献を考えている
方はとても多いのだと言います。でも、特に規模の大きな寄付を生かす方法や仕組みはまだ十分
に整っていないということのようです。

富裕層が安心して寄付を通じて社会貢献できる適切なスキームがないという実情に、ソリューショ
ンを提供しようとするのが、2021年3月に公益認定を受けた「日本フィランソロピック財団」です。





FIWA®通信「インベストラ이프」

理事、評議員は、金融業界、財界、社会課題の解決などで活躍をされてきた方々が揃っています。

具体的には、寄付者が関心のあるテーマやおもい、応援したい地域などを指定して、財団がそれに沿った「基金」を作り運営します。公募をして助成先を募り、選考委員会が応募団体から助成先を選考、理事会が決定、そして、対象団体などに助成を実施するという仕組みです。

テーマとして挙げているのは、例えば、「地元や故郷の伝統継承やまちづくりのための基金」や「難病患者の支援や治療のための基金」「地球の未来のための基金」「貧困や関連社会問題解決のための基金」などです。

■基金を通して様々な社会貢献をする

金融機関で金融商品の開発などに携わってこられた長谷川さんは、大学の寄付事業の応援をきっかけにファンドレイジングを学び、そして現在、寄付者の「おもい」を聞いて基金を設立するという仕事をされています。

「おもいのこもった大切なお金を必要なところに届けたい。新しいお金の流れをつくっていきたい」という気持ちからです。

基金には、個人の寄付者の「おもい」を作る「デザイン基金」や、テーマ別に多くの人に共感してもらい寄付を募集する「テーマ基金」があるそうです。

他の財団と違う大きな特徴は、現金を寄付してもらい取り崩して使う(助成していく)だけではなく、寄付された資産を運用して得られる収益も使って、継続的に助成していく継続型基金の存在です。運用のバックグラウンドがある理事等によりそれが可能で、有価証券や不動産などの資産も受け入れるということです。

■基金で実現できる未来

支援先は、子どもや次世代の将来、科学技術やイノベーション、地方の創生や文化・芸術など多岐に渡っていくそうです。

長谷川さんは、寄付者の「おもい」を丁寧に引き出し、寄付で未来を変えることができる分野に対し、支援を行っていききたいと話します。

「一つ一つを形にしていくのはとても体力がいる。生まれたばかりの財団ですが、寄付者にも助成先にも頼られるような財団に育てていきたい」(長谷川さん)



FIWA®通信「インベストラ이프」

それぞれの活動と寄付者の「おもい」を結び、「意義ある寄付」として大きく育てていく。
長谷川さんにお話を伺って、新しいお金の流れが始まったのだと感じました。おもいのこもった大切な個人のお金が、社会の、地球の問題や課題を解決していく。温かな希望の光を確かに感じました。

日本フィランソロピック財団のサイトはこちらです。

<https://np-foundation.or.jp/index.html>

長谷川攝さんのプロフィール

四半世紀にわたって、フィデリティ投信、アライアンス・バーンスタインなど外資系投資顧問会社・投信運用会社で商品企画開発とマーケティングに従事、海外の投資信託の商品・市場分析を生かして、日本の投資信託に新しいスキームを持ち込み、投資家の裾野を広げる使命感に燃えました。2020年、日本フィランソロピック財団に参加、海外では Donor-Advised Fund (DAF) と呼ばれる財産を基金として寄付する仕組みの日本版を育てています。日本フィランソロピック財団理事・事務局長、フォスター・フォーラム事務局長。准認定ファンドレイザー。